

9/60



會 報

舞 台 照 明 家 協 會

— 目 次 —

四人四題 (1)

△装置家寄稿二題▽
近代バレエの舞台装置
—その歴史的省察—
レヴェーの舞台照明断想
..... (2)

国際劇場
今年夏の踊りから
△私の履歴書▽
戦後十五年を省りみて
..... (9)

△世界の各地から▽
中国で感じた舞台美術のこと
ハワイよいとこ
オーストラリアのこと
..... (4)

変った話と変らない話
国立劇場に想う
..... (7)

最近のステージから
..... (15)

表紙 ☆ ☆ ☆ ☆
有賀二郎
大田 弘道
..... (17)

滝尾 輝雄 (4)
相馬 清恒 (8)
大野 洋 (10)

阿部吉之助 (12)
秋山 易三 (9)

小林亮太郎 (2)
三輪 祐補 (5)

小川 昇 (7)
藤本 久徳 (16)

四人四題

大切なこと

△照明は侵蝕

されている▽

生活的問題を中心に照明を考えた場合、舞台との仕事は正常な発展の道を進まない限りそれに携わる者の生活権は安定されない。この意味から最近の狀態から考えて、我々の職業の中には何か大きな危険性を感じずにはいられない。全体と云うことでは決してないが、舞踊家との仕事の上でその感じが多い。

最近の舞踊家の一部では、こと照明に関して甚だ安易な考え方をしている人がいる。極端な例を云えば、照明は学生のアルバイトでも間に合うと云う考え方である。又一方では照明担当者の居ない貸ホールの電氣係の人にそれを要求し、技術的裏付けのない自然発生的な照明で客を誤魔かしたり、或いはそこにいる担当者に不当な要求をするなど、種々問題がある。

◆.....◆
高柴正夫
松崎照明研究所
照明の仕事は技術が身上である。所が現在では、それが舞台人一般に本当に認識されているとは残念ながら言えない。そこでその頼まれ方も極めてズサンな形が多い。そしてそれを受ける我々の側も無意識的だけでなく、それをそのまま安易に仕事としてしまう事が多く見られる。その結果、下手をすればその仕事はいかさま商品を売りつける大道商人的になる恐れさえある。大切な我々の職業なのだからその芸術性と技術性を自ら傷つける様なことをせず、舞台人全般にも認識される様な啓蒙の努力をも忘れずに仕事を続けたいものである。

△照明の

技術性の認識▽

△習慣となった 徹夜稽古▽

凡そ合理的な物の考え方から遠かった日本人の長い歴史から伝統的につちかわれてきた日本人気質の特徴である義理と人情そして企業として難しい歴史の



中途である舞台・興行。その両者が実に複雑にからみ当然の結果として出来上って、多くの人が意識・無意識的に仕方のないものと思っているものが徹夜稽古である。

故にこの寛容の精神を發揮する見事な義理と人情の結晶である。然し、徹夜稽古と言うのはどう考えても健全ではない筈。何時かは何とかしなければいけない問題である。精神や肉体の消耗が最悪の場合には生命にさえ危険を及ぼす我々の職業の上から、義理と人情も程々にと云いたい。

山本順三

国際劇場

△仕事の

誇り▽

昨日のドラマの灯り、きれいに出来たじゃないか。ふと、思いがけない人からそんなことを云われて、少し面映ゆい思いでパターンに出た私の名前を覚えてくれた友人に嬉しい感謝の気持を感じることがある。所が他局の番組などを見ても殆どの場合照明の名前が出る事は少ない。スタジオでの作業の終結と共にその結果は我々

とは遠い存在となり、個人的責任範囲での正当な評価を得ることが難しくなる。この事は出来上った仕事はほめられたりけなされたりと云う現象的な物足りなさだけでなく、自分の仕事が一歩監視者の前に出ると自分とは無関係の所にほろり出されてしまっている様な空しさを感ずる切なさの方が強い。時間に追いかけられながら、一つ一つの仕事を唯ベルト・コンベアの上の物品の様に送り出すだけなら何も云うことはないのだが、精神的にも肉体的にも一つ一つ大きな努力で作りに上げる仕事の結果は、最後まで自分ものだと云う気持が持てる様配慮されたいものである。

照明家の義務を裸のままに放り出し、捨て忘れさせずに正當なプライドを持てる様にすることが、心の張りを持って明日への努力と期待につながれるものと私は確信する。

青木久一

N T V

大田弘道

小川舞台照明研究所

四人四題

大切なこと

近代バレエの舞台装置

その歴史的省察

三 林 亮 太 郎

バレエは、ルネッサンスの頃、イタリアに生れた。後にフランスに渡り、ロシアに拡まった。殊に、近代バレエはロシアをその発祥地としている。

二十世紀初頭まで、バレエの舞台装置の本質は、オペラや演劇のそれと同様、台本の指定する特定の環境を創造するということであつた。しかし、一九〇七年バレエ・リュウスのディアギレフが現われて、ブノワ、バクスト、ゴンチャロフなどの装置家を紹介するに及んで、バレエの装置の本質は、環境の創造という従来の枠を破って、より以上その環境の幻想化を表現するようになった。云い換えれば、バレエにおける装置は、ディアギレフのバレエ・リュウスの出現と共に動かない舞踊手のような役割も兼ねるようになったのである。それは、ゴンチャロフの「火の鳥」の装置、或はバクストの「カーニヴァル」の装置を見れば一

目瞭然である。

例えば、ゴンチャロフは「火の鳥」の才二幕のために、林檎の木を一面に描いた背景を考案したが、しかし、その絵は踊り手の背の高さより下方に低く描いてあつて、上部の空の部分には星の瞬く夜空が一色で塗られている。そして、それが装置のすべてである。以上だけでは装置として奇妙な印象を与えるが、舞踊手が登場してくると、急に生彩を加え、ポーズや運動の線を一層際立たせてくれるのである。

また、「カーニヴァル」におけるバクストの装置は、舞踊手の背の高さから上部の方の壁を全部大きな花模様で埋め、下方の低い部分の壁は緑色一色だけの無地という不思議な背景を描いている。その壁面の前に、アルカン、コロンビエ、ピエロ、その他の多様な仮装舞踏会の行列が現われて踊り初めると、それが

実に壁面上部を飾り立てている花模様と調和して、一幅の立派な生きた絵となるのである。

バレエ・リュウスの出現を契機としてバレエの装置は完全に近代に入るが、それまでは、前述の様に装置家は装置家、振付家は振付家、作曲家は作曲家という風に、夫々独自に創作に専念していたので他の仕事との連絡がとれなかった。そのため、それらの仕事を一つに纏めた場合、常に、アンバランスなバレエ作品が出来上ってしまった。装置家は、裝飾の歴史とか、或は各時代特有の建築様式に対する造詣は深かったが、ただ、それだけのことに過ぎなかった。従つて当然の結果として、その仕事は潤いのない極く公式的なものが多く、バレエと有機的に結び付いた構図や色彩の研究は少なかつた。装置家は、距離感を作るため遠近法の法則の活用にはばかり専念して、

新しい装置芸術を創造しようという意欲に燃えることがなかった。

遠近法がルネッサンスの芸術家たちによつて発見されて以来、十九世紀末期まで装置芸術を支配していたが、その遠近法を王座から引き降ろそうと最初にそれを試みたのは、フランスのポール・フォーの率いる象徴派の連中だった。彼らは、舞台の全体的調和を求め、装置の単純化を叫んだ。彼らの提唱するところのものは、程なく全ヨーロッパに伝播された。

丁度、その頃、ロシアにマモントフがあらわれた。彼は、舞台装置は踊り手や歌手や俳優のための単なる背景ではなくて、それ以上の有機的なものとなりうるということを考えて最初の人である。統いて、前述のディアギレフが登場して、バレエ装置の近代を決定的なものにしたが、彼はブノワ、バクスト、レリーッヒ

ゴンチャロヴァをはじめ、ドラシ、マチス、ローランサン、ブラック、ルオー、ピカソ、ミロ、キリコ等の近代絵画を特色づける画家たちに、舞台装置の仕事を請負わせたのである。就中、ブノワ、バクスト、レーリッヒの三人は、バレエ装置史上、近代の出発点を築いた。

貴族的に洗練されたブノワ、彼はフランスのルイ王朝時代の華麗な色彩に輝く装置には特に優れた手腕を見せ、十八世紀様式の再現では彼の右に出るものはいなかった。また、色彩混合の名人バクストは、赤色で気狂いじみた色彩を、白で冷たい色彩を調合した。「カーニヴァール」で、彼はロマンチックであった。「シエラザード」では官能的であった。「青い神」では神秘的、「タマール」では野性的、「ナルシス」ではリリックであった。一方、スケールの大きい、野性味に溢れた作品を得意としたレーリッヒは粗い原始的な舞台を描かしたら天下一品であった。この三人の装置家の仕事は何れも異質なものではあるが、しかし、一様に共通した一つの特徴がある。それは色彩と形体と構図にみられるムード、スタイル、アトモスフェアに対する鋭い感覚である。彼らの作品は、それまでの自然主義と遠近法を否定している。そこには、もはや、実際に出来得る限り似せて作ろうとする努力の跡は少しも認められない。実際そのままの室内や風景は見ら

れない。あるものはプロセニアムを類似としたバレエと有機的に結び付いた一枚の背景である。

十九世紀末期から二十世紀初頭にかけ、あらゆる芸術が反動的になったことは云うまでもない。バレエの装置もこれの例外ではなく、二十世紀初頭の、バレエの装置は舞踊と音楽との完全な調和を必要とするということを見出した。バレエの装置は装飾でも、抽象でもなくなった。バレエの装置は動かない舞踊手の役割をするようになった。バレエにおける装置と音楽と舞踊との関係は、例えてみれば、山と空のような関係になった。つまり、互に独立しては、存在し得ないものとなった。この緊密な関係を最初に示したバレエは、一九〇七年、バレエ・リュウスのミッシェル・フォーキンが振付してペテルスベルグで上演した「アルミード亭」である。これは装置、衣裳、照明、音楽、振付が一体となって初めて調和のある舞台を見せた記念すべき作品である。

さて、装置が舞踊を生かすか、殺すかということは、その装置が舞踊に対して真に空のような役割を果しているか、どうかという点にかかっている。バレエ・リュウスが上演した数々のバレエの装置は、何れも舞踊に対して空の役割を立派に務めている。もともと、装置というものは、舞踊や音楽に対して調和の意欲

を欠くと冗舌になったり、舌足らずになつたりする。冗舌に過ぎると絵画的に流れ易く、裝飾的になってしまう。舌足らずの場合には、抽象的となり、その表現しているものが、何んか解らなくなってしまう。装置を舞踊と調和させるためには、舞踊の焦点に装置の焦点を置かなければならない。しかし、舞踊の中心は舞台の中央である。その舞台の中央は何も飾られていない広々とした空間に過ぎないのであるが、その広々とした空間を装置家がどのように処理するかということがまず第一の仕事である。この空間の処理を考えると、必然的に、地舞台の取扱い方が重大な意義をもつてくるのである。単なる舞台の平面も考えようによれば、立派な装置の領域の一つである。舞台上の広々とした空間の処理はこの地舞台を配慮に入れてこそはじめて可能となる。

一例を挙げれば、セルジュ・リファール振付の「アレキサンダー大王」の中の宮殿前の広場のシーンは、舞台上一面に絵の描いてある布を敷いて、地舞台を装置の一部に見做したものであった。それは黒い線描の升目で、石畳をあらわし、丁度、方眼紙を敷きつめたような具合であった。この石畳の上で踊られる待女たちの踊りは、升目の黒い線の上に限られていて、幾何学的な直線の動きを見せ、舞踊の軌跡と装置の構図が一致するもので

ある。舞踊のスペースを広くとることはバレエの装置を創作するとき、まず、最初に考えなければならぬ事柄である。この「アレキサンダー大王」の舞台装置は、地舞台も装置の一部として利用することによって踊りの舞台を最も広く、最も効果的に用いた好例である。

元来、バレエの舞台装置は踊るために考案されるのであるから、尨大な装置を組むことは禁物である。今更云うまでもないことだが、バレエにおいて装置が使用出来る面積はまことに狭い。この狭い面積の中にあつて、前述のバレエ・リュウスのディアギレフに協力を借しまなかつた装置家や画家たちは、次々と自由闊達な広々とした感覚のバレエの世界を築いたわけである。

以上のように、近代バレエの装置は二十世紀に入ってディアギレフのお蔭で進歩改革され、当時衰え気味であったバレエは前途に光明を見出して蘇生し、現今の隆盛の基礎を作つたのである。もっとも、これはバレエが何よりも見るためのスペクタクルであるということを知れば至極あたりまえの事柄であると思う。バレエを視覚の点から、つまり、装置、衣裳の面から改革したことがディアギレフの賢明な狙いであった。彼は見せるためのスペクタクルを制作した。そこが彼の偉大さを最もよく示した面であった。スペクタクルの世界の一つである絵画の人

々をバレエの装置家として大々的に起用した点が、彼の天才である。彼は一九〇九年、バレエ・リュウスを携えて西欧に進出してから、ほんの十数年の間に、現在、近代バレエの名装置と見做されるものの、ほとんど大半を作った装置家を世に送ったのである。

去る二月には、前進座訪中公演に参加し、今度は新劇の訪中公演にも参加し、再び中国を見る機会を得たので、中国での、舞台美術の現状というか、みたまゝ記的なことを少し述べさせて貰います。

前回の訪中の際に、み落したところもあるのですが、今回はそのみ落したところを充分にみてくるつもりです。ですから、この、みたまゝ記は、不十分なことだらけとも思いますが、お許し下さい。

中国滞在は、六十日間でしたが、そのうち公演をしたのは、二十日間で、後は見学、セミナール、観劇等で、ギッシリ詰ったスケジュールの中で、芝居は三十余りみました。主に旧劇ですが、新しいものとしては、話劇(日本でいう新劇)を三本、オペラ、バレエを二本みました。旧劇は、京劇及びこれに類した地方劇が主でした。

こゝで、舞台美術的にとり上げて話題にすべきものとしては、話劇、オペラ、バレエ等で旧劇に関しては、二、三を除いては余りふれないうおきます。

しかし、バレエの舞台装置に貢献したものは、ディアギレフの団だけでは無い。スエーデン・バレエ団は「スケート・リンク」「世界創造」(以上の装置はレジェ)、人間とその欲望」(バル)「休演」(ビカビア)などの名装置を作っている。また、バレエ・リュウスの後

先ず、話劇からいゝますと、一口にいって、舞台装置は実に簡素です。といって極端な省略を行っているのではなく、部分的には、相当にリアルな処理がなされています。

全体としての構成が、ゴテ／＼していいないということですが。

例えば、北京でみました「降竜伏虎」

継者であるド・バシル・バレエ団は「遊戯」(ミロ)を、同じくバレエ・リュウスの落し子であるモンテカルロ・バレエ団は「コッペリア」(ドブジンスキ)「愛の証」(ドラン)などの装置がある。また、バリ・オペラ座専属バレエ団の「イカール」(ラルト)や「ダビデの凱旋

イトを光源として、その前方に、ガラスに絵を画いたものを置いて、山や森、雲等を出しています。その投映された、画面が、実にソフトで、いゝ味を出しています。

勿論、ホリゾントとの距離が二間以上もあり、仕事はしやすくなくなっています。そして、全体としての構成が、少しも

芝居の邪魔をしていないというこ

△世界の各地から▽ 中国で感じた舞台美術のこと

滝尾輝雄

れば、芝居

という芝居でしたが、正面に、パーマネットに四尺高位の土手風のものがあり前舞合上手下手に出る装置を変え、そして正面のパーマネットの土手の後方に、ホリゾントへ投映する幻灯器を仕掛けて、背景を変えていました。この幻灯も至極原始的な方法で、吾が国でも昔はこの方法を用いていたそうです。

パンチライト、若しくは、ボックスラ

に必要なものだけがあり、不必要なものは全て省略されています。これは、舞台美術の根本理念だと思えますので、別に新しい事柄でも、不思議な事柄でもないのです。

しかし、この当り前のことが、吾が国では、やゝもすると、忘れられている場合がときどきあるようです。舞台美術が前面に押し出され、芝居そのものを助け

ているどころかかえって、妨害している場合が多々あると思います。

舞台美術が、必要以上に説明的であつたり自意識過剰になると、芝居に邪魔になるということですが。

ですから、中国でみた、この芝居のよろに芝居に必要な、最少限度の装置・照明が一致して、同一目的に向つて、調和のとれた、舞台を創造しているということとは、吾々の眼に実に、自然に、しかも印象的に感銘をあたえてくれました。

中国の裏方の人達との何度かの、座談会でもいろいろ話し合つた中で、一貫していつもいっていることは、吾々が百も承知の、舞台美術の根本理論なのです。

すなわち、舞台美術とは、必ず、その演ぜられる内容、テーマ等を強調することを極く自然に行い、決して自己主張的行動に出るはならない、あくまでも、総合芸術であるという自覚のもとに、その演ぜられるものに協力するものである。

とこのように云っています。これは新理論ではないのですが、吾々は、もう一度、このことを振りかえつて考え直さなければならぬ事だと思ひます。

(一九六〇・八・二四)

レヴェューの舞台照明断想

三輪祐補



的表現をも光線によって解明し、その効果を考えに置いて色彩或は照角等を研究具象化されたい。

☆☆☆☆

レヴェューの舞台は他の演劇舞台の装置とくらべてより多彩である。それ故にその照明はある面非常にむづかしい。セツトに負けない様になどとの単純な考えでやたらに色彩照明をほどこすならば、かえって濁ったきたないものになってしまふおそれがある。色彩におほれない様に願いたい。

☆☆☆☆

レヴェューの照明もやはり演出方針によつて演出才一主義でなされなければならぬが、ボードビリアン、舞踊家、歌手等の一流スタアの表情や演技をピックアップしてより明解にみせる様にしなければならぬ。しかし、スポットライトイングする場合、背景セツト、また群舞、コーラス等ともなう時、それ等から遊離したり、また混濁したりして舞台の雰囲気をおこなない様に全体的の統一が必要であり、プランメーカーはもとより、インテーパーレーターたる各スポット操縦者も特に注意してほしい。

☆☆☆☆

レヴェューの華はライندگانである。数十人の若い潑刺とした美しい娘達が、そのほこる脚線美をおしみなく躍動させて肉体をほこるとき、観るものをして思

う。我々がレヴェューのセツトデザインをする場合、より良い効果を發揮するためには特に照明のことを考えなければならぬ必要は今さら云うをまたない。

☆☆☆☆

レヴェューのモットウとするところは、豪華、スピード、情熱であると信ずる。我々のセツトデザイン作成の上に於ても当然そのことを考えの中に置かなければならない。同時に協調的部門であるところの照明に於ても、そのプラン作成、並びに照明転換の課程で、それらのことが要求されるものである。

☆☆☆☆

レヴェューは美しいものである。これは一般に共通した考えである。照明も審美的な思考、表現で、より美しくありたいものだ。しかし、審美的と云うことにはかりとらわれない。舞台の上では種々の心理的表現が具象化されている。セツトもその線でなされているはずである。照明もよろしく主題がともなう心理

☆☆☆☆

かつて、イギリスのクレীগ氏、スイスのアピア氏等が、空間そのものの本質を追究し、立体化された舞台装置と照明による色と光の象徴的效果に着目、とくに光線の意義を重視し、舞台上のすべてものに調和をもたらし、また深みと雰囲気とふるえる生命を与えるものは光であると説いた。以後、装置も照明も共に協調研究し、今日のすばらしい舞台芸術の一部門として発展をとげたといつてよい。とくに近代に於けるレヴェューの立体舞台の中の光と色彩のハーモニーは目をみはるものがある。

☆☆☆☆

さて、舞台装置は舞台機構、経済に制限されるといふことは既に衆知のことであるが、ことに、レヴェューに於ける老大な多数場景の装置製作、飾り込み、転換の要求にこたえる場合、それはいっそう注意されなければならない。必然的に照明部門に於いても同じことが云えると思

我々の云う、レヴェューは、そもそもフランス、アメリカから輸入されたものであるが、現在日本の通念としては、音楽、歌を伴う軽演劇から発展したシヨウであり、近時はもっとスペクタクル的な舞台のミニージャカル・シヨウをさして云う。欧米のレヴェューが衰えをみせるときその舞台効果やスケールの大きさに於て、日本独特なものになって来た。

☆☆☆☆

この大きいシヨウは、世界各国のあらゆる舞踊、歌、寸劇を初め、日本特有の民族舞踊を初め、日本舞踊、歌舞伎劇のひとつこままで包含し、その羅列の妙によつて観客を楽しませるものである。その表現手法も様々なテクニクを駆使して随所に非常にスペクタクルな舞台装置をも折り込んで居り、新しい舞台芸術として高度に発展している。この一翼を担う舞台装置、照明の分野に於ける進展は、まったくレヴェュー発達急先鋒であると云って良い。

わず前へのび出させる。その効果を充分發揮させてくれるものは照明である。如何にして踊子の若肌を美しく見せるか、その肌の艶、その肌の色気を充分に輝かせる色彩、明るさがあるべきである。照明家各位の苦勞もこのとき楽しさで一杯になるはずである。

☆ ☆ ☆

レヴェーの中で、ライندگانの踊子の一人が足を上げるのを間違つたらその舞台はぶちこわしである。音楽団の中の一人が演奏をあやまつたら、もう目をおゝいたくなる。踊りも出来なくなつてしまふ。照明にもそれが云えると思う。各照明器具の操縦者の一人が間違つたらどうだろう。観客には見落しがちなことであるし、踊りにも影響がない。だからと云つてこれはゆるさるべきでない。各操縦者は縁の下の力持ちであると思つていたら心得ちがいはなはだしい。客席から見えない操縦者のあやつる光線は、踊り子と共に舞台上で活躍しているのである。照明プランナーの意図した通りに操縦してもらいたい。

☆ ☆ ☆

レヴェーの舞台では照明エフェクトも多く用いられる。雨、風、その他の天体現象を初め、火事その他の異変も照明にたよるところ大である。また背景画やキリダン等の道具によつて出せないものや運動するもの、或いは急速なチェンジを

必要とする凶柄等、照明にたよらなければならぬことも非常に多い。そして、その適切な舞台効果は偉大なるものがある。

☆ ☆ ☆

レヴェーを作つてゆく各部門、即ち、装置、衣裳、舞踊、音楽その他に年々新しいアイディアが生まれ、研究され、発展している時、照明部門に於ても勿論研究討論されて居るのだから、もっと積極的に新しいアイディアの提供がなされるのも良いと思う。他の演劇舞台に於ける照明と違い、レヴェーの場合、ある場面に於ては照明も堂々と表面に出て来ても良い。

☆ ☆ ☆

レヴェーでは多数場景転換のため、又構成、演出、舞踊、演技の必要で、ホリゾントカーテンその他のカーテンのみの景が間々ある。その様な場合、照明はまゝたく装置にとり変つて、視角的に観客を楽しませるものである。照明の独壇場と云つて良い。

☆ ☆ ☆

レヴェーの舞台装置には古典的な材料手法のみでなく、近代的レヴェー感覚にマッチした手法、材料も多く用いられる。在来の材木、紙、布、泥絵具の他に現代では鉄材、プラスチック類、塗料でもビニール塗料を初め螢光塗料その他のあらゆる材料を使用する。それ故、照明に於

てもこれ等の材料に対処する研究も大いに必要である。在来のアーク灯やタンクステン灯のみでなく、螢光灯やネオンを初めとして、あらゆる電灯、器具を使用して舞台装置に花を咲かせてほしい。

☆ ☆ ☆

レヴェーの舞台では先にも示した様に多数の場景によつて構成された各景は、夫々日舞、歌舞伎調、又、バレエ、モダンダンス、歌等々のそれも古典、近代と異質のものを集大成したものが多し。それ故、その各景の舞台装置の表現手法も様々である。そうなつてくると協力を願う照明の手法も、各景毎に適切最高の効果を考え、あらゆるテクニックを駆使してもらわなければならない。しかも尚、レヴェー全体として一貫した調子も必要である。まったくレヴェー照明はふくさつ高度の芸術的感覚と技術が要求されるものである。

☆ ☆ ☆

レヴェーは明るく楽しいものである。舞台装置もその精神で行つて居る。レヴェー照明も照度と云うことを忘れてはならないと思う。これは明るさである。どんな場合にも必要でその目的によつて明るさは異なる。しかし、よく見ると云う基本的な条件の中にも環境とか心理的な表現が構成されなければならないことは衆知のことである。

☆ ☆ ☆

レヴェーには多数の出演者が登場する。これを有効的に観客に示す為、舞台装置の方も立体的に組上げられることが多い。また比較的平面的小人数の舞台面でも、照明の手をかりて陰影を与えより一層立体的にして深みを作り出す。光と影、これもレヴェーに一つの階調をあたえるものである。

☆ ☆ ☆

レヴェーは歌と踊りと色と光のシンフォニーであると云つて良い。全篇を流れる音楽にも明暗の調子がある様に、舞台照明の光の分布にも心しなければならぬ。景ごとのセットに対する光の集散の状態、セットばかりでなく登場して居る人物に対しても云えることである。光をどうやって必要なところに必要だけ当てるか、なかなかむづかしいことだ。又、これは各シーンの中だけではなく、多数にわたるレヴェー全体に渡つても考えられなければならないことである。

☆ ☆ ☆

レヴェーの各シーンでは、複雑なセットの中で、様々な演技、舞踊が変化多く展開されてゆく。これをもっとも効果がる様に示現するには、光の投射角度の変化によつて、その心理的表現の変化をも助長してゆくことが出来る。光線の方は自然現象の変化を表わすものだけではないと心得べきである。

☆ ☆ ☆

レヴューの舞台装置は多彩であると先にも書いた。しかしこれは、いたずらに色を並べたものではない。レヴュー各シーンの内容によって、その色彩は決定されてゆく。音楽にも感情がある様に、色彩の持つ感情も大切にしなければならぬ。色彩照明によって醸成される感情価値は観客に非常に大きな影響をあたえるものである。音楽の持つ感情と共に、聴視覚一体となって観客にうったえることを忘れてはならない。

レヴューに於てスベクタクルということが大切な一つの要素であるならば、照明によってもこの要素を満たしてはほしいものである。変化の多い投射ばかりでなく、数えることも出来ない無数の灯入、或いは無数のイルミネーション、街頭でも見られない様な豪華なネオンの輝き、それが高価に思え、手数のかゝったものであると思わせることに成功すれば観客は驚嘆の想いに尚一層拍手をかけるもの

☆ ☆ ☆

である。

☆ ☆ ☆

レヴューのフィナーレは文字通り絢爛豪華の極致である。舞台は大階段にうづめられ、装飾は目もまばゆいばかりである。全員登場しての歌と踊りに音楽も最高調にたってゆく。この豪華舞台をいやが上にも引き立たせ、レヴューの華を咲かせ、実らせるのは、まったく舞台照明に於ける光の文飾である。

変った話と變らない話

小 川

昇

時々昔の仲間が集って無駄話をする集りがある。仲間というものは何か共通のものがある。自然に出来るもので、此の集りも例外でなく初めの頃は殆ど毎日のように集って同じようなことを話し合っていたものである。然しい永間には仕事も異ったり、お互いの生活も変ったりで集った時の話にもいろ／＼変化がありそれがかえって話のすむ原因にもなっている。話の合わないのはその男が変ったのではなくて他の者が変ったのである。それに気付いて変な気がした。

先日、或る会合で、度々一緒に芝居の仕事をした友達に会った。永く芝居の仕事をしていた男だがこのところ十

年位は全然芝居から遠ざかっていたようだ。その男の云うには、「先日久々で芝居を見たが昔と全く同じだね。舞台も演技も芝居の内容も全く昔のままだね。仮に僕が再び芝居の中へ入って行ってもこれではあまりブランクを感じないかも知れない」彼は只感じたまゝを話したのだから、こちらには、お前等は十年間何をしていたのだと云われたような気がした。全く彼の云う通りだろう。我々は芝居の中に入っているのがつかずかずにやっているが、偶に芝居を見る人は誰でも彼と同じ感じを受けるのではないだろうか。

舞台及テレビスタジオ照明機械器具
螢光灯調光装置
社交場各種照明装置
ミラーボール及電飾装置

設計製作



渋谷区伊達町63

株式会社 電 照 社

TEL (441) 9042

南国の太陽にくっきりと浮んだ幾

つかの小島に続いて、目指すオアフ島が眼下に美しく現れ、快適なジェット機の六時間二〇分が過ぎて、ギターとウクレレの音楽とレイに迎えられ真昼の飛行場に下り立つ。東京も暑かったが、それとは違ったサラッとはしているがともかく暑い陽差しだ。恒例の「桜まつり」に踊る二世の日本舞踊家達（西川・坂東・花柳・尾上流の四派合同）に招かれた七人の侍（スタッフ）の一人として遙々南へ約六〇〇〇軒の御存じ南国の楽園である。

Don't forget 12.8（十二月八日を忘れるな）と記された立札の一寸前に懸るパール・ハーヴァー近くの飛行場から時速八〇哩のフルスピードの自動車で約四〇分、素晴らしい静かなホノルル市に着く。ホテルは新築改装の小林ホテルである。

ハワイオ一夜。ワイキキの夜が美しい。東京の街灯にあたる重油のタスマツが浜辺の道を明るく照らし、云うなれば流しのハワイヤン・バンドが甘い音楽を奏で——それも、五人の豪勢な流しであるが——ホテル・バーで飲むスカッチは、まさし

く旨い。

滞在十五日間の殆どを、昼は海に泳ぎ夜も更ければかくなる具合に今日はこゝ明日はかしこと飲み、飲み、飲んで、何んとも結構な毎日の連続であった、などと云っていると、一体何の為にハワイくんだりまで行ったのかと云われそうなので少しは劇場に関することも御報告したいのだが、実を云えばハワイには余り劇場はない。間口六間、奥行五間位の小劇場が幾つかあるのだが、こゝでは主にストリップなどが上演されて居り、我々の桜

△世界の各地から▽

ハワイより

相馬清恒

まつりの日本舞踊はマッキンレー・ハイ・スクールの講堂で上演されたのである。舞台は間口八間、奥行五間半、タツパ八間、二〇〇Wポーターが三本に若干の仮設サスがあり、フロントはサイドに各四台のKW、シーリングKW六台、はるか彼方のセンターにアーク・ピン・スポット二台の設備である。

間口一杯に百数十の提灯のアーチを作り、上演されたものは一部が日本の「おさらび」的なもの、二部が「三人狼々」、阿国歌舞伎、荒城の月、などと云う

一本もの。評判の良かったのは、沙羅など使い甘くロマンティックな、荒城の月であったようだ。

配電盤は各サキット単独に接続されたオート六〇本を持っていたが、どうも感心出来たものではなかった。

刺激の強い土地柄か、日本舞踊でも白灯りは敬遠され、殆んど色を用い、それどもどちらかと云えば強い色彩に人氣があったのもアメリカ的と云えるかも知れない。公演は夜一回六時開演で十時まで、後は再び……どうしても飲む話に戻ってしまつて恐縮

だが、これも事実と云うことで我慢しておつき合い願いたい。

我々を招待してくれたのも日本青年商工会議所であり、又大歓迎してくれたアメリカ上院に議席を持つ二世・井上さんと云う人など、周囲が殆ど日本語を話す人達であったのだが、全体的に日本語が良く通じるのだから生活に不自由はなく、まして酒を飲むのに苦勞はいらない。値段も東京に比べればジョニー・ウオーカー（黒）七・一ドル、CCが五ドル位で較安である。そして生活水準と云えば、失業者零多で人件費が掃除のオバサン達で一時間一・二五ドル、ペンキ屋、タク

シー運転手等で一時間三ドル位、大体平均年間収入九五〇〇ドル（約三五〇万円）だそうだから正にパラダイスの観光都市ハワイである。

ホステスは居ないが数多くのナイトクラブがあり、日本からも二、三人から五、六人程度の踊りのチームが良く来るらしい。ストロング製らしいフォーカス自在の優秀なピン・スポットがそんなクラブのシヨウに使用されていた。限られた土地の故か、犯罪は皆無だそうで、海浜での飲酒が法律で禁じられたり、交通事故などの罰則が極度に厳しい等、生活がぜいたくなこともそうだが、人間を尊重する街の風習など東京の街に比べて矢張り遙かに文化的であると云う実感を得た。オルゴールの音が何処からともなく聞えていた広い芝生の墓地の美しさも印象に深かったし、飛行場の歓迎に見たムームー（ハワイの着もの）を着た、ひげそりあとのある四人のハワイヤン・バンドのオバサン達の伴奏で開かれる、週二回のコダック・フィルム主催プラ・ダンスの会も楽しかったし、殆どが上流であり今でも日本びいきの、人口の半強を占める一世、二世日本人達に囲まれて過した十五日間であったが、何んとも結構な二週間であった。

ハワイ良いとこ一度はおいで一度と云わず、またおいで……

国際劇場

今年の夏の踊りから

秋山易三



年間興行日数の上から云っても約々以上の打ち日を持つ、四大踊り、は、文字通り国際劇場の売りものであり名物である。幸い都内や近郊の顧客のみならず外人観光等にも好評らしいのは大変喜ばしい。それだけにその上演までには色々苦心やら各関係者の努力が当然あるわけだが、その幾つかを簡単に御紹介したいと思う。

先ず企画の段階で云えることは、期的には相当早く（前の「踊り」の初日から十日目位）からその企画に入るのだが何時も必ずと云って良い程、その追い込みの時期になると時間の足りなさが歎かれるのは不思議なことである。

企画は原則としては各スタッフからの持ち寄りになっており、照明家の立場としての私にも積極的発想を求められるのだがどうも思う様にはいかない。これは私自身の責任でもあるのだが、一つの原因として云えることは、劇場の電気全般の責任者としての仕事の忙しさに追われ

がちであること云うことも事実である。そこで私の立場からの発想と云うのは、どうしてもシ・ウが具体的な形になってからの段階での、協力的な意味での積極さしか持ち得ていない。

次に、今回の「夏の踊り」の中で照明的に最も大きな仕事の分量であった才一景に就いて具体的な問題を中心に話を進めてみよう。

今回の才一景は、御覧になった方はお解り頂けたことと思うが、大変な灯入れ工事の装置であったわけである。

これは従来四大踊りの中で「夏の踊り」の序幕が洋舞であることから、どうしても弱い感じをまぬがれないということから、劇場支配人（岩田氏）の何か横

面を張り倒された様な強力なダイナミックなもの、と云う意見を中心に種々検討された結果として、装置担当の三林氏からのアイデアに依るものなのだが、大概の事には慣れている筈の我々にとっても、その具体化は可成りの大仕事であ

あった、と云えるだろう。

概容を説明すると、三列になったドロップに七W球約一〇、〇〇〇灯を4点2減で点滅するイルミネーションの灯入れ工事である。一言で一万灯の灯入れと云うと、あゝ、大変ですね、などとは云われても、限られた舞台でのその仕事の実際問題は仲々解って頂けないと思うのでその内容を少し記してみたいと思う。

先ず始めにその容量を早く正確に握む必要があるわけだが、実際に出来る舞台の絵づらを計算しながらその電球の配置計算と点滅プラン・容量計算等は時間的制約内での仕事としては可成り難しい仕事と云えるだろう。

最初に計算されて出て来た数字は先にも述べた様に七W一万灯で総容量七〇KWである。これを何度か整理検討の結果約七千灯、五〇KWにまで減らしたのだが、それで点灯でも約三五KWのコンセントが必要なわけである。何処の舞台へ行っても三五KWのコンセントなんて

設計 製作 施工 販売
配電盤 調光器 照明器具

舞台照明設備

丸茂電機株式会社

千代田区神田須田町1-24
TEL (251) 0321・2767・6981



あるわけではない。精々六KW(六〇A)である。そこで先ずこの電源工事が最初の大仕事として登場する。八〇スケアで、二回線を配電盤から舞台へ設置しなければならぬ。既にあった三八スケア一回線とで総容量四八〇Aである。

一方では七千灯のレセップ工事が、大道具さんの協力に依って早く出来上ったドロップに続けられているわけであるが五日間昼夜ぶつ通して延八〇人の電工々事になった。又三台のスイッチは十八段式で4点2減、一台の大きさが、長さ約一七〇%、巾五〇%、高さ八〇%のものである。

これらの仕事の外、舞台であるが故の種々の工夫もなされなければならない。例えば、ドロップとスイッチを分けねばならぬ為に特別のプラグ(約一五〇A)も作らなくてはならない。何と三コで十二万円と云うステージ・プラグとも云えない代物である。

又、一旦幕が上れば、仕込みはともかくバラシてドロップが飛んで暗夜のホタルの景に移るまで一秒の時間も惜しまれるわけで、重いスイッチを三台のアンクル・ワゴンにのせて一見乳母車の様な物に作り上げたのも、大舞台の中でのごまやかな照明家の苦心のチエである。

所が、今回の、夏の踊り、で最も苦

▼世界の各地から▲

オーストラリアのこと

大野 洋

四八、〇〇〇円。……これはオーストラリアに於ける勤労者の給与の最低ベースだそうである。

さもありませんと思う。メルボルンの劇場の配電盤係が真っ白な新車で通勤していた。デパートや会社・官庁は勿論、一般商店やフラットと云われる下宿屋さんの食事まで土曜日は半日、日曜日は完全休業で、街で開いているのはコーヒー・ラウンジと呼ばれる軽レストランと映画だけと云う徹底の仕方なのだから、劇場とて例外ではなく、通常二回だけの興行で水・土曜だけがマチネーなのにもかゝらず日曜日は同じく休演なのだからうらやましい。

この様な恵まれた生活の中にまぎれ込んだ私には、今迄それ程までに身にしみては感じなかった世界的に有名だと云われ、今や外国資本に眼をつけられさえていると云われる日本人の安さを痛感しないわけにはいかなかった。

年々歳々、数多くの日本から出かけてくる各種芸能人(総称してアーティストだ

そうである)を受け入れる在外領事館筋も、こうした日本人の安売りに心を傷め、大きな悩みとなっている様である。

もっともこの悩みも、話としては逆さまになるのだが、その安売りをその地のユニオンの方が、彼等の生活権を乱すそんな外国人の安売りは許さないそうだから、相手側の地にユニオンさえあれば、結果としては日本人がいくら安売りをしてもその最低ベースだけは保証されることになって、先ずは安心?と云うわけだが、どうもおさびしい話ではある。

安い日本人が外国へ出て外国のユニオンにその最低を保証(?)され、高い外国の芸能人が殆ど無制限に日本へやって来て歓迎されると云うのは、どう考えても主体性とは程遠い珍妙な事柄の様に思われる。

広大な土地を持ちながら人口の少ないオーストラリアは、南米ブラジルあたりと同様大変移民が多い。もっとも、未だに皮ふの色の問題が残っているのか、白人

だけに限られていて日本人等の移民は許可されていないそうである。然し、皮ふの色の問題がたとえ解決されても、日本人の安売りはそんな所でもきつと大きな問題となって残るのではないだろうか。

安売りはともかく、そんな種々の事情から人困当時は色々苦勞されたらしい戦争花嫁さん達が、今ではその殆どが幸福な家庭生活を築き周囲の人達からも敬愛されているらしいのは、矢張り豊かな国なればこそであり、又、各国からの移民が多いと云う特殊環境にもよるものだろうと思われるが、ともかく嬉しいことだった。

ヨーロッパ系ではあっても、ともかくイタリヤ・ハンガリー・ギリシャを主として多くの外人が混然と生活していることから、一寸考えると大変国際色豊かな街の情景が想像されるのだが、実はそうではない。

確かに街へ出てレストランに入ると英語もたど／＼しいハンガリアンの主人が出て来て、フルーツをフリュイツなどと云って、たゞでさえ頼りない英語の私などがどきまぎさせられたり、或いはAAVの発音が普通とは全く異り、MAVBEをマイビー、PAPERをパイパーなどと云うなど、フィリピン英語の語尾のAV以上には解らない発音をしたりするにもかゝらず、この国を包んでいる感じは全く私達の思っている保守的な

心したと云えるのはこの老大な灯入れの才一景ではなく、郷土芸能、盆踊りの八景各場面に通して使用した、高さ九尺、巾十四尺の廻り灯籠に統々映して各地を象徴した灯籠の工夫であると云えるだろう。

二台の灯器使用に見える連続動シムレットのだが、灯器使用に依る平面的な絵の欠陥を補う為には小さな廻り灯籠に写ったシムレットをそのまま拡大すればいいし、連続的な絵の変化の為にはそれを二台併用すれば簡単な様に見えるのだが、これは大きさ・距離・人手・それに転換時間等種々の制約で不可能であった為、特別に作った長い切り抜き絵を、チェーン利用の誘導ベルトで次から次へと紙芝居の絵を連続的にさし込んで行く様にして行くと云う、一見原始的に思える工夫が、結果として中央にピントを合せば両側がボヤケながら大きく歪んでゆくと云う予期以上に立体的な廻り灯籠に見える好結果を生んだ。

概して今回の「夏の踊り」は各スタッフの協力によって良き成果が得られた様に思われるのだが、自賛が過ぎようか。

只、呼び物の一つ屋体崩しが、山・岩場と云うシチュエーションの設定にやゝ無理があった様に思われ、初めて屋形なしの屋体崩しになったわけなのだが、今後に相当の研究の余地が残った様である。

◎ 新入会員

(昭和35年3月1日より10月末日現在)

- | | | | | | | | |
|------|-----|---------|------|-----|------|------|-----|
| 氏 | 伸介 | 世田谷 | 三宿 | 225 | 穴沢 | 照研 | |
| 飯塚 | 勝美 | 川口市 | 芝新 | 13 | 22 | 明治座 | |
| 藤親 | 一勝 | 文京区 | 大塚 | 仲町 | 9 | 明治座 | |
| 須貝 | 勝 | 横浜市 | 保土谷 | 区星川 | 町 | 明神 | |
| | | | | 24 | 101 | 明治座 | |
| 富田 | 修好 | 中野区 | 野方 | 町 | 1 | 638 | |
| 福島 | 孝衛 | 浦和市 | 前地 | 3 | 112 | 明治座 | |
| 池田 | 正信 | 中野区 | 宮園 | 通 | 2 | 13 | |
| | | | | | | 荻野研 | |
| 加藤 | 光治 | 世田谷 | 区三宿 | 194 | | 田中照 | |
| 富宿 | 菊生 | 新宿区 | 東大久保 | 1 | 443 | 中西 | |
| | | | | | | 研 | |
| 原田 | 新平 | 新宿区 | 戸塚 | 1 | 508 | 早稲田 | |
| | | | | | | ア | |
| | | | | | | パート | |
| 井上 | 延一 | 新宿区 | 戸塚 | 3 | 74 | 日進電 | |
| | | | | | | 機 | |
| | | | | | | フリー | |
| 国井 | 昭広 | 足立区 | 与野 | 町 | 248 | フリー | |
| 斉藤 | 博水 | 渋谷区 | 幡ヶ谷 | 原町 | 888 | フリー | |
| 富沢 | 真次 | 品川区 | 南品川 | 6 | 1511 | フリー | |
| 梅田 | 昌次郎 | 品川区 | 高円寺 | 1 | 450 | 文学座 | |
| 樋古 | 川幸 | 大田区 | 新井 | 宿 | 4 | 996 | 文学座 |
| 片瀬 | 一彦 | 葛飾区 | 本町 | 35 | | 松坂ホ | |
| 辻本 | 晴彦 | 港区 | 桜川 | 町 | 5 | 共栄荘 | |
| 中村 | 哲也 | 横浜市 | 南区 | 蒔田 | 町 | 1010 | フリー |
| | | | | | | 5913 | |
| | | | | | | 教育レ | |
| | | | | | | ビ | |
| 春原 | 悟 | 板橋区 | 南町 | 27 | | 浅香方 | |
| | | | | | | ASG | |
| 五十嵐 | 幸治 | 港区 | 芝高 | 浜 | 28 | | |
| | | | | | | 歌舞伎 | |
| 岩淵 | 御行 | 目黒区 | 中目黒 | 3 | 1144 | | |
| | | | | | | 歌舞伎 | |
| | | | | | | 座 | |
| 滝口 | 十四郎 | 練馬区 | 練馬南 | 2 | 35 | 松竹荘 | |
| | | | | | | 歌舞伎 | |
| | | | | | | 座 | |
| 友山 | 曉 | 板橋区 | 下赤塚 | 町 | 472 | 歌舞伎 | |
| | | | | | | 座 | |
| 建壁 | 与四郎 | 北区 | 中十条 | 2 | 7 | 大庭照 | |
| | | | | | | 研 | |
| 井口 | 昌彦 | 世田谷区 | 経堂 | 町 | 451 | 大庭照 | |
| | | | | | | 研 | |
| 橋本 | 孜 | 世田谷区 | 代田 | 1 | 417 | | |
| | | | | | | 大庭照 | |
| | | | | | | 研 | |
| 大森 | 重夫 | 墨田区 | 寺島 | 町 | 2 | 87 | 大庭照 |
| | | | | | | 研 | |
| 黒岩 | 萱子 | 新宿区 | 西大久保 | 2 | 300 | | |
| | | | | | | 大庭照 | |
| | | | | | | 研 | |
| 中島 | 政良 | 豊島区 | 堀之内 | 168 | | 大庭照 | |
| | | | | | | 研 | |
| ◎ 脱会 | 会 | | | | | | |
| 加藤 | 克次 | 国際劇場 | | | | | |
| 深沢 | 栄宏 | 足立産業振興館 | | | | | |

感じである。
アメリカ風を特に嫌い、ケバケバしさや空騒ぎの風潮などは全く見当らないしともかく質素で堅実で静かな平和な国である。
四人に一台の割と云われる自動車で見えその多くは四〇年代からせいぜい五〇年代初期の車で、だから東京では殆ど見られないそれこそ踏み板のついた車に立派な紳士が誇らしげに乗っているのも珍らしくなく、それに比べて、私が滞豪中にアメリカ製の新車に出合ったのはたった一回だけと云う程である。

英国流の礼儀正しさ、徹底的なレディ・ファストには少々肩がこったけれど、ともかく幼く人達が豊かで時間的に余裕があり、その上に生活が質素でござらぬ性格だから、街全体は何となくのどかで

のんびりしていて、私の知る範囲でも気のいい人が多かった。
所が一方、矢張り人生の後半を他国で暮している移民者達の事情や環境からその人の好き、人なつこさの一枚裏に独立心と云うのだろうか、自分だけを頼りに生き抜いて来た人の他人への不信感の様なもの、そしてそこから出るのではないかと思われる様な計算高さ等を感じられて、ぎょっとしたこともある。日本人同志にはない独特の人間関係が築き上げられている様だ。

然し、ともかく彼等は身分相応の中ではあっても着々と自分の生活を現実に行っている。だから、私が何回か招かれて経験したその彼等の生活の中での誕生日のパーティやさやかな親戚一族の集り等は、何か私達が毎日くり返している六〇円のコーヒーや五〇円のハイボ

ールの楽しさとは違った、質素ではあっても私にはぜいたくにさえ思えた人間的な生活の内容が感じられた。
仕方なかった。
飛行機で南へ二十時間。そこには日本の北から南の端までよりも長く広い砂漠の広がる静かで平和な国があり、そこには更に遠くヨーロッパの各地からやって来た多くの人達が、遠く故郷を離れながらも私にうらやましく感じさせる程の内容ある生活を着々作り上げていた。

私などは、自ら生れた国に住み、そしてある時にはこの自らの国の美しかったり、優れていることを誇りに思うことはあっても、彼らの生活の中に感じたあの何とも云えぬ内容を実感することが稀なのは、何とも残念なことである。

戦後十五年を省りみて

阿 部 吉 之 助



想えば昭和二十年八月十五日筑波才十飛行場大隊で終戦を迎え、九月復員、通信省電気試験所に復帰したが、敗戦の痛手と混沌とした世相の中では研究課題ものぼらず、それに加えて電力事情の悪化が輪をかけて気力の方もすっかり失い、只暗い気持ちで日々を過ぎて居る中で、インフレの荒波は増々大きくなり老母と小さな弟妹をかゝるの生活は苦しく、意を決して東京に出て居る叔父に職の依頼をした処、運よく宝塚が米軍に接收されその要員を必要として居るとの話で、早速出頭して試験を受け採用された。

十五日間歩いて五百円得た時の嬉しさは(試験所では月収九拾五円)、何んとも云えぬ思いだった。

準備期間も終り、三月才一回の公演は伊藤道郎構成演出のバラエティショーだった。下手の照明室に入れられ、アークスポットの原理を教えられた丈でアーク三台、吊りスポット二台をあてがわれたが、何が何やら判らず只スポットにしがみつき、インターホンから叱咤され、無

我夢中だった。どうやら要領も判り、アークのたき方も、キッカケも判つて来た処、調光室に廻され調光機の手入、ワイヤーの調整、ディンマーの調整、プリセットの手法と教えられた。その時中本さんに云われた「教えられるより盗みとりそれを納得する迄考えよ」と言葉が今だに忘れず胸の奥に刻まれている。あの頃は照明に関する本など無く、先輩の話を聞いてそれをノートしておく事が一つの勉強方法であった。

劇場では伊藤道郎構成のショー、タバスコ、ハワイまつり、其他と、米軍極東慰問隊がかゝつたので、ショーに対しては非常に勉強になった。自主公演のオペラ、ミカド、が上演準備され、二十一年

七月公演の運びとなり、装置は喜朔さんでホリゾント一杯の大屏風のセットであった。ドラマも「毒薬と老婆」と続いて二、三本公演し、クリスマスには、クリスマスキャロリー、が公演され、その際トップライトを二台特設して使用した。

其他、二千余灯の灯入、幻灯の多角的

使用、プリズムの使用、クロウドマシンの使用、クラシックミュージックに対してのムード照明使用等アメリカ人の色彩感覚(一例として、ボーダーのグリーン系統の使用を嫌ってラベンダ、ピンクの使用)による色彩使用法を習得した。其の間キャンパへ慰問ショーが出て、スポットを持ってかり出された。

二十二年四月、日劇小劇場公演強化の為転出の話があったので、アーニーパイ劇場を去り日小へと移った。その頃の日小は戦災の傷跡も痛々しく、照明設備も皆無の状態で普通の分電盤に三キロの円盤抵抗器、七・五キロのダルマ型オート各一台ずつで、羽子板とヒューズホルダーを改良したものを使用し、フロント

は無く客席に上下と一台ずつ吊しスポットがあり、ボーダー一本とフットライトがある丈で、営業も四時迄に昼公演は打上げて、夜は名人会に早変わりであった。そこで配置転換の人と相談して分電盤を改良、オート、抵抗を使用し易い状態にし又日劇の倉庫をかき廻しアーク一台を

組立て、客席にかこいを作り設置し、ストリップライトを修理してボーダー代用を設け、エリヤ・サスの吊り込み、舞台ボケット新設等での配線工事もパイプ工事の材料皆無で、碍子工事で行う始末だった。此の様な中で、喜劇人のなやまし会、東京レヴュー、新風俗、新風ショー等の公演がなされ、月末には小屋貸などをやりながら一年を過ぎた。

営業状態も良好なので三ヶ月の休場をとり、改修工事に着工。照明関係もオート十八本、プリセット付の配電盤が入りボーダーホリゾントの増新、サス回路、舞台ボケット回路の増設をした。フロントは一キロ四台二回路の吊り固定式、パルコニーに一キロ三台三回路、センターにはアーク三台、ランプ一台を設け客席に花道が設けられた。

改修後才一回公演は俳優座出演の「瓊れ薔」が公演され、篠木さんがこられてあれこれと器具の注文が出され、日劇から大分器具を持出して使用した。殊に景色のバックに購の分数を使用され、非

常に良い効果を上げられた事が今でも目に浮ぶ程強い印象を得た。それにともない自分の今迄の行き方に疑問が湧き、又自分の努力の未熟にそして仕事に対しての欲が出て来た。

その後墮胎医・鐘の鳴る丘・又職場演劇コンクール等があり、鎌倉アカデミー公演で、若きウェルテルの悩みが上演され、穴沢さんが来られて場数の多いのと変化の多い事に対してプリセットの活用で処理した。その中で墓場の景で井78と井。のエリアでの洋傘に当る照りが強く記憶に残った。

其頃日劇で隔月宝塚が公演される様になり、其の事で配置転換があつて調光室に廻る事になったが、今迄の無理と不節制がたゞり発病、入院して一度に暗い人生となった。

会社の委託療養所なので、撮影所関係の人とも知り合いが出来た。入院して一ヶ月を過ぎると、精神的にもゆとりが出来肉体的にも小康を得たので、周囲を見る度に自分より悪い状態の人が全力を出して闘病生活を行つて居る姿が目映つたので、自分の療養態度に深く反省する様になり生きる事に強い意が出て来た。幸い体力も回復し病状も良い方向に進み得たので、此の期間に基礎的なものを勉強しようと、演劇・電気・照明と手あたり次才読みあさつた。今考えると非常に良い勉強をしたと思う。

そうこうして二十四年三月退院、アフタケヤーの二ヶ月も終えて会社に復帰したが、会社では再建実施中で復職を認められず、失業者になり職を探したが仲々無いので長期戦の構えをするうち、幸い長門オペラの北海道公演の話が出たので参加した。

出し物は、ミカド、お蝶さん、の本立で、札幌では松竹座と真駒内の米軍キャンプの昼夜別公演の強行であった。

その頃、松竹座に水抵抗が置かれて長い竹竿で操作して居た。函館では巴座で豊敷にオーケストラボックスを特設した事を記憶して居る。此の旅は自分としては再出発の仕事であり、苦しい身体に鞭をうち全精力を出して事に當つた。そのかいあつてか、プロデューサーから東京に帰つたら東宝芸能へ来る様にと云われ、早速出頭した処新宿セントラル劇場にこの話で早速話が決り、劇場に行ったのだが、現在の東横ホールの山口さんが責任者としてそこに居られた。芝居・アルバム・ショー・ショーの三本立で、その日より勤める様になった。

十月には矢田ダンシング・ショーが公演され、穴沢さんがプランをたてにこれた。この時に強く得た印象は空間処理技術で、小さい劇場を如何に深く表現するかを教えられ、ハリゾント・舞台中間部・エプロンステージと、アクトポイントに於ける色彩の組合せの利用による深さ

の表現等と、又矢田さん独特なリズムによる振りの表現が非常に強烈で音楽と照明との関連性を強くする外、心理的な色彩に就いても、要求して居られた事を記憶して居る。此の事から自分ももっとリズムの種類、数の取り方を教えてもらう様になり、その後も合間にバンドの人からピアノの手ほどきをうけたりした。其頃の公演もまだ夕方迄で、夜は小屋貸など行つて居た。

二十四年十一月末、営業状態が不振なのでストリップ劇場に転換する様になつた。此処で自分の進むべき道に疑問を生じて、一先生に相談をした処色々話されて、どんな出し物になつても仕事に対して誠実なれば必ずそれに依つて救われると強調された。そして、もうしばらく様子を見てから動く様にと言われ又自分としても小劇場の事をもっと研究する事にしてとどまり、隙をみては日劇・国際・帝劇・日比谷・読光・共立等と見学して歩き、溜息をついたり批判的になつたりした。又ミュージカル映画はかゝらず見て、はてしない夢を描いては仕事に対する情熱を湧かして居た。又アルバム・ショー上演の折、参考品として、世界美術全集が備えてあつたので、美術書より構図色彩の知識を得ると共に、自然と名画を見る事に慾望を感じ始めて、個展・美術展と見て廻つたり美術雑誌などを購読したりしてそれにより具象から次才に非具

象・抽象的なものへと心を引かれていった。又詩的表現とか、心理的表現との言葉に対して疑問が出て、詩の原理を握むべく本を読み、心理学の本を取りよせたりしてひたすら勉強した。

二十七年十二月新宿劇場開場のため、山口さんの転出がありその跡をやる様になった。今迄貯えたプランを実行する様にしたが、予算・器材の制約で思う様にならず、何んとか貸してもらへる処にはどん／＼廻つて効果を上げる様にした。ヌード・ショーには美しさがオ一と考え、この線にそつて色彩も考える様になり、田口三郎さんの色彩環・井手則雄さんの色彩帯と、配色参考になるものは、手当たり次才、実験を行った。装置の先生と相談をして、点描方法を取つてもらつたりセットの材料にも新しいものを使用してその効果を計算した。又照明小道具の製作、夜光塗料水の噴水等の使用で効果を上げた。

ヌード劇場であると云うコンプレックスと闘つて来たが、幸い記者関係に認められ激励もされ、内外より総合美術賞を授与された。予算のとおり方、人の使用方法、ともすれば乱れがちの内部を何んとか協力させて、仕事をした事は、初めに書いた、仕事に対して誠実なればどんな出し物でもそれに依つてすくわれると云う教訓と、美は習慣に支配されるとの言葉を大切にして事に當つたお蔭と思う。

二十九年九月、舞台人の不始末により火災をおこし閉鎖となった。焼跡の整理を終えて一ヶ月は何も手がかず過ぎてしまった。十一月になって東洋興行よりセントラル時代の技術を活用して呉れとの話があつて、とりあえず見学に行った。考え方の違いか、もっと改良の余地があると思ひ、又浅草の小劇場にもっと美しいものがあつても良いと考えて、三ヶ月契約をして勤める事にした。

内部に入つて、見たり聞いたりして驚いた事に、事務所では照明係など認めて居らず雑役と同じ考えで処理をし、照明係は開演中は割振りを行い外出して居り仕事にも熱が入つて居らず、仕事も統一されずばらばらで今迄の劇場では一寸考えられない状態であつた。此の様な事ではとても良いものは得られぬと思ひ、思ひ切つて社長に宛て意見書を提出して説明にも行つた。

照明係の職種の確立、定員の確保、不良社員の配置転換、遊休器材の使用、設備改良等の申入れを行つて許可をとり着手した。相当強い風当たりもあつたが、大きな目的の為に小さな事は捨てるべきと思ひ結果を見て呉れと立ち向ひ、協力者を見つけて力を合せて事に當つた。

配電盤の整備、フロントサイドにアークの新設、シーリングの新設、舞台回路の整備増設等で何んとかショーに適合する設備に一段と近づけた。公演も演出家、

大道具、振付家とも相談して事を進める様になつた。

三ヶ月になり後任に適任者が出来たので、もっと広い世間を見る為に、適当な処を探した。幸い産経ホールに就職が出来、新しい配電盤操作技術を勉強する事が出来た。

三十年二月、日比谷公会堂サービスピスに籍を置き、公会堂の配電盤保守をする様になつた。此の間、改造となり新しい配電盤が入り器具も入つたが、まだの状態である。

此の様な貸ホールに勤務して感ずる事は技術的未熟者の方が器具の扱い方が乱雑で、使用しても跡始末が実に不完全である。技術指導を行う際に器具の取扱方法、清掃方法も指導すべきだと思ふ。

三十一年七月大野洋君のあとをついで矢田ダンシングチームと共にシンガポールを振り出しにマレーを三ヶ月巡業。三十三年二月にサイゴンに芸能親善使節団の一員として一ヶ月働いた。

此の時に貴重な体験を得た。それは言葉は通じなくとも、自分が仕事に対して誠実なれば、お互ひの精神的なものに合つて意志が通じると云う事であつた。此処にシンガポールより帰る途中で、書いたノートがあるので写して見た。

、思ひ出のシンガポールを定刻より一時間遅れて、午後八時二分に離陸す。思へば七月初旬シンガポールを振り出しに

三ヶ月間マレー各地を巡業して、今機上の人となり一路母国に向つて行くと、過ぎた事が走馬灯の様に儼に浮んで消えてゆく。思うに彼等はあきらめの民族だと思ふ。不可能を可能にする事など考えない。突きつめる精神など殆ど感じられない。只安易に、その日その日を過ごして、希望も理想もない様だ。民族の性格の相違の漫々の持主と、快々の持主のギャップは双曲線だと思ふ。己がやつて模範を示し、此れを要求する考えは当てはまらない。もっと精神的なものに合つて事に当らなければ駄目だと思つた。この事は戦争中、共榮圏などと美辞麗句をならべて、右向け、右をしても、彼等はそっぽを向いて居つた事が証明する。

と結んである。だが現在とは違つて来た様である。数年の間に彼等はあきらめの精神を打破して彼等の理想と希望と新しい国家を建設する事に踏切つて、前進を開始している。

此の何かを打破する力こそ、我々にも必要とする力だと思ふ。我々の生活を省りみてもあきらめの精神は多い。あきらめる前にもっと物事をよく見きわめて、ものの真髄に触れて行くべきと思ふ。それには与えられた事に対して、誠実さを持つてあたらなければこのものの真髄に触れる事は不可能であるが、それを為してこそ物事の前進があり、進歩があるのだと思ふ。

多年の経験・最高の技術

スポットライトランプ

…… 舞台照明用電球
…… テレビスタジオ用電球

- 各種映写用電球
- エキサイター・ランプ
- リフレクター・ランプ

★その他特殊電球の御用命に応じます。

東京都品川区北品川4-560

光研電気株式会社

TEL (441) 5 0 7 0

●●●● 最近のステージから

国際劇場

“夏の踊り”を観て



大野洋

オ一景の燦めく噴水からグランド・ウ
 ォーターフォールに至る全十六景が快調
 のテンポで満員の観客を魅了し、恒例
 “夏の踊り”が一時間半の刻と夏の暑さを
 忘れさせる。今や世界的に有名な国際
 劇場の四大踊りの一つ、夏の踊り
 を見て、以下思いつくまゝの感想を記し
 てみたいと思う。

オーケストラのイントロダクションで
 場内真暗な中に幕が上がる。

ASIV

舞台は一面のイルミネーションでまば

ゆく埋り、色違いに幾段も重ねられた電
 球の点滅が豪華で美しい。文句のない絢
 爛たる幕開きだが、商売の故か、気がつ
 いたことは、その灯入れ工事がさぞかし
 大変なことだろうと云うことと、又次は
 これよりももっとたくさん灯入れをと
 云う様なことになる、すでに技術制
 約的行きづまりがくるのではないかと云
 う心配である。又、余りにも一面のイル
 ミネーションが街の広告灯を連想させる
 と云うことから、芸術的表現への工夫
 が今一歩欲しい様な気もする。

絢爛たる光の洪水から移るオ二景から
 オ四景は、ホテルとあさがおに依る日本
 調子の夏の幻想である。快いハーフ・ト
 ーンの装置が美しい。

続いてオ一の中山へ大蛇ヶ滝である。
 山峡の部落に起る人身御供の話が大
 蛇ヶ滝Vの屋体崩しの場につながる。広
 島の無形文化財、有田神楽の大蛇をとり
 あげているの感じが感じとして舞台がその
 大蛇に余り中心を置き過ぎて、屋体崩し
 の迫力がかけてしまった様に思われたの
 が残念である。

こゝで、こゝまでに至る四場の装置が
 様式的にやゝ未整理な感じを受けたの
 だが、五景Aの山峡の場は、いっそもう
 少し写実感があっても良かったのではな
 いだろうか。

国際名物アトミック・ガールズのライ
 ン・ダンスは何時見ても、何回見ても楽

しい。名物の名物たる所以である。

次の山場は、オ八景のジャングル・パ
 ラダイスである。白と黒を中心にまとめ
 られた豪華な装置の中で、金銀の衣裳の
 男？女を中心に強烈なラテン舞踊がくり
 ひろげられる。踊りと照明の変化が、都
 会的感覚でアレンジされた華やかなジャ
 ングルのファンタジーを巧みに盛り上げ
 る。スポット・スタンドと思われる出道
 具が舞台中央タテ二列に並んだボジシ
 ンが中でも美しかった。

白いあかりの美しさ。

所治海氏デザインの衣裳が美しいオ
 九景、エイト・ピーチエスのインディ
 ン・エコーは、潑刺として楽しく快い舞
 踊シーンである。こゝで気になったこと
 は、衣裳との色彩的関係(黄と黒中心の
 インディアン姿)にも起因するものと思
 われるが、白のあかりの美しさと対称的
 に色を用いた場合(オール赤の照明に変
 った時)、国際劇場のアーキ以外、特に
 フロントのランプ・スポットの光量不足
 が強く感じられたことである。

カラー・チェンジャーを持った強い
 シーリング・ライトを充分欲しいもので
 ある。これはフロント・サイド無しで
 ショウをやったメルボルの劇場を想い
 出し乍らの私の思いついた印象である。

プランカートの一〇〇%利用に依るパ
 ックの中のバレー・イン・ブルーは踊り
 の印象が弱い。

プラステート

電灯・電力・一般照明工事設計・施工
 電気自動化装置並に電機機器販売取付

東京都中央区新川町2丁目3番地

TEL (551) 5916・5072

妙光電機株式会社



国立劇場 に想う

藤本久徳

国立劇場も古典上演の才一劇場のみが建設される事になった様です。

国立劇場の建設の意義が、日本の伝統的な古典・歌舞伎・邦舞などの保存が目的であるとすれば、私は首をかしげざるを得ないのです。

国家が保護しなければ滅びる様な伝統なら現代に於いても未来に於いても不必要な伝統です。

唯単に技術の保存・継承と考えるならば私達舞台人は単なるロボットに過ぎず、何一つ発見は無論のこと、発展すら望めないでしょうし、技術だけ切りはなして考える事はおかしなことです。

劇場芸術は書画骨董の如く国家が買取って破損しない様に保存し原形を止めて置けばよい様な品物ではありません。

こゝから夏の踊りの呼びもの郷土芸能「盆踊り」七場面が次々にくり上げられ客の眼と耳を魅きつけて離さない。

中央に飾られた大きな廻り灯籠の絵が、次々に変わる盆踊りを美しく象徴し、郷土色豊かな盆踊りに一段と趣きを加える。廻り灯籠以外の装飾的工夫が——例えば上下奥の市松模様出入りの為ののれんやアーチ・ドロップ・困いの処理等——もう少し整理されても良かったのではないかと思われる。近来の名篇に今一步、と云う無責任な感想をつけ加えさせて戴く。

今期夏の踊りの最も優れた庄巻とも云えるのは、この盆踊りのラスト阿波踊りの終りから、海のコンボシジョン、に至る場面転換の妙である。極めて美しい川路龍子の阿波踊りの引込みにかぶさって高まる鳴門の渦のSE、そしてスクリーン一杯の渦のシネスコ。そしてリップルのオーヴァ・ラップ。見事な場面転換である。欲を云えば、映画の終りをFOにしたかったし、出来なければアイリス・アウトでも。そしてリップルをもう一段デザインされたものが出来たらと思うが、然しともかく出色のシーンであつた。又、海のコンボシジョンのフット・スポットも見事な効果をあげている。モダン・ジャズ、簡潔な海底のセットそして意表をついた様な赤の衣裳、ブルーとイエローの二重のフット・スポット

の巧みな構成、この快心の場面は音楽の良き理解や優れたシヨウの創造力の結晶であろう。

ファイナル。舞台一面の滝・噴水は正に国際劇場の面目躍如であり、一時間半の夏の踊りの最後を文字通り絢爛たるファイナルにしている。

世界の国際劇場の名に恥じない優れた舞台を創られた総べてのスタッフに心からの敬意を表したい。

最後に勝手気ままな、失礼なたわ言のついでにもう一つつけ加えて貰えば、プログラムに依る構成——松竹歌劇団に対する苦言になると思うのだが、その構成面の中で部分的に舞台美術的だけではないもう少し大きな意味——仮に視覚的構成とでも云おうか——で一本芯の通った、色彩的構成から生れ出るだろうと思われ、より強力なリズムカルでダイナミックな効果にやゝ不十分なものを感じられたことが残念であつた。

無礼なる一言、御容赦！

昭和廿五年八月一八日所見



<次号予告とお願い>

次号才十号は会員からの寄稿を中心に編集したいと思つていますが、遅々たるものながら舞台照明の重要さも認識されつゝあり、協会も発足以来満四年を数えます。協会の内外を問わず、舞台照明家としての種々の問題——例えば技術低下の問題——又は生活的な問題等——相当の問題があるのではないかと思われ

ます。才十号はそれらの我々の中にある色々な事柄の各自の立場からの自由な発言を期待しています。匿名希望の方はその旨お知らせ下さい。当然のことながら、寄稿原稿は編集部でその一切の責任を負います。皆さんの寄稿をお待ちします。

才十号編集担当

沼田勝夫

劇場は博物館ではない筈です。常に時代の尖端に立ちリードして行かねばならぬ立場にあるのではないのでしょうか。

古典と今日の芸術とは断絶があり伝統がその中に存在しないという考えは間違いです。伝統というものは常に次の世代に新しく受けつがれ発展し時代に生き、私達の好むと好まざるとに関係なく存在するもので、私が日本人である事が変えられない様に私達の中に現に存在して居るものと考えます。ですから私達が今日創造して居るものは私達だけのものではなく古典につながり、又は伝統となり得るものと考ええるのです。今まで私達は余りに過去に囚れ現代を忘れ過ぎていたのではないのでしょうか。今日、私達に最も必要なのは過去ではなく現代ではないでしょうか。現代を如何に描くか、は大切な事だと考えます。

国立劇場に私達が望む事は、決して過去の芸術の保護だけではなく現代の芸術の保護でもあると思います。古典にのみ日本の伝統や芸術を見出そうと思っても果せる事ではありません。常に新しく創り出す事を忘れては日本の伝統芸術の発展は望めないと思うのです。

◆投書欄◆

声



あちこちの職場では色々な声を数多く聞くのですが、この会報には仲々その声ののりません。

二百数十名の会員がいるのですから、当然もっと多くの声を紹介出来ると思うのですがなか／＼思う様に集りませんが、それでも今回は幾つかの声が出ました。最後の、二つの願いはニュースからの再録です。次号はもっと徹底的に会員からの投稿・寄稿を中心に編集する方針の様ですから、この声欄の発展的な内容を期待したいものです。

職業としての確立

こゝ二年程およばずながら事務局の仕事をして参りました。やれ理事会、やれ事務局会議それ連絡だ、通知だ、常任理事会だ、又々会報発送と無い隙を追いまくられながら時々フツと何かむなしき努力をしているのではないかと迷う事があります。

私達事務局のメンバーは、少い時で一ヶ月に約五日間の時間をさいて常時五、六人が協力を少してでも発展させ様として動いて居るわけです。一年間に一人で約六〇日五人としても延一〇ヶ月の時間を費やして居るのです。所が協会発

の生活の糧であるプラン料さえ認められないとすれば私達は何で生活して行くのでしょうか。舞台関係者でさえ此の状態で、世間一般はどう見るのでしょうか。先日私は或る経験を致しました。それは前々から電話の設置を電話局へ申し込んでおいたのですが、私の住んで居る地区は非常に電話事情が悪いので、設置の優先順位が住宅用より一段上の業務用として申請してありました。開通出来る様になったので料金を支払う様にと通知があったので手続きに行つた所、局員と私の間で次の様な問答が行われました。

局員「職業別電話番号簿に記載するが職業は何か？」私「舞台照明家なり。」局員「しばらく帳簿を見て。」「その様な職種は無いがどの様な商売か？」私「これ／＼しじかじかなり。」局員「では芸能人か？」（又帳簿を見て）「その様な職業は見あたりぬ。」私「美術家の分類には無きや？」局員「やゝしばらく調べから。」「やはり無いが他に心当りの分類無きや？」私「頸をひねる。」局員「奥に引込んで同様としばし討論：戻つて来て。」「調べる手段無し。」私「此の様な時は如何するや？」局員「番号簿の記載を省略する他なし。」

此所で私の誇りある職業は無視されてしまいました。私達がプロとして此の職業に従事して居る以上その日その日の仕事に最善を尽

すのは当然であり、又個人個人の向上はあくまで個人個人が負うべき責任だと思えます。しかし私達の仕事を職業として確立させて行く事は協会が存在する以上協会が行う最大のそして最優先すべき事業ではないでしょうか。

対社会的に私達の職業と協会を

協会の実体を見つめてみよう！

舞台照明家協会が出来てからもうすぐ満四年です。この間、会員は始めは一〇〇円、あとは五〇円の毎月の会費を納入しています。この会費は税金ではありません。……と云いたい所ですが、残念ながら現状では正に日本の国の税金の様なものではないでしょうか。何故なら、払いっぱなしで、その結果に何も成果らしいものがないのがそっくりだからです。所が国と云うものが既に在ることに比べれば、協会は我々が作ったものであり、進んで入ったものなのだから、その会費と云うのは税金に比べて、もう少しはつきりと何か効果や成果を期待しても良いものではないでしょうか？

色々なその原因は考えられます

向上発展させて行くのは大変な難事業と思いますが、その目的のために会員が発言し、行動して行けば何時かは達せられる望みではないでしょうか。

私は照明家として、一協会員として、事務局員としてそのために多忙になる事を望んで居ます。

岩崎 令児

が、最も大きな欠陥と思われるのは中途半端な協会運営にその因を見出せるのではないかと思うのですが如何でしょうか？そしてその遠因の一つは一見安く見える会費です。一人一ヶ月五〇円位ならそう高きはあるまいと云う安易な認識の上で立てば、総べての成果がそこに帰結されて、何の成果がなくても殆どの人がその税金の成果に対して極めて当然な様に無期待と無表情の立場に立たされてしまふのです。所が一年間六〇〇円で会員二三〇名とすると総計約一四〇、〇〇〇円になります。これがあたかも我々が税金の如く、その成果に余り期待出来ないとする、それは矢張り浪費と云わなくては行けないのではありますまいか。

そんなことになってしまふのは何故か？そこに具体的な近因として、パート・タイマーの現在の協会運営をあげては現

実を知らない暴論になってしまいましょか？

パート・タイマーは、それぞれの立場の人のそれぞれの状況に依って成り立つ便利的に見える方法ですが、然しそこに内在する無責任性と言う欠点が協会運営の大きなガンになっているのではないのでしょうか。

昨日まであたかも一生懸命責任を担っているかの如く何かをやって来た人が一度自分の仕事があれば何は置いてもそれをしなければならぬから、そこで多小気にはかまっても協会列車は一旦ストップするわけです。それもどうやら何時でも坂道の中途の様です。斯くなる状況の連続に依って協会は結果的には会員一部の無関心と、そうでない意志と行動の散発によってその貴重な時間と会費を眼にも見えない空間へ放散して年々過ぎて行き、何時までたっても創立当時と変わらばえのない立ち止った協会の姿なのではありますまいか。

そして、無関心は一層無関心にならざるを得ないし、意志と行動の放散を何回かくり返せば、そこに起るのは空しい虚脱感だけでしようし、その虚脱感の上には無形な何ものから責任感でも持たされて悪循環をくり返し、無意味なカツヤクを続けている人の姿を見ると、失礼だし申しわけないとは思いますが、コッケイ感さえ感じられたりして、お気の毒に思

ます。この際一度徹しく現実を見つめて協会の本当の姿とこのまゝでの協会の運命とに気づくべきではないでしょうか。

特に実質的に協会の柱であり、骨であり、肉である協会設立発起人達にそれを望み、そして今後の内容ある活躍を期待したいと思えます。

結びに、先般配布された会員手帳にある協会会則第二章を記して、協会設立の意味をもう一度想い起し確認してペン置こうと思えます。

「この協会は照明技術と技術者地位の向上を図り、併せて会員相互の親睦と福利を増進することを目的とする。」

会員 X

会員手帳の活用

先日配布された会員手帳に就いて希望を一つ述べたいと思えます。

私達TVに力く者ばかりでなく、多分劇場付きの人でもフリーの人でも、何か自分の勉強の為にとか或いは仕事の為に余り見知らぬホールや劇場へ行くことがあると思えます。又行きたいと思うこともあると思えます。そんな時、この会員手帳が何らかの身分証明書の役割をしてくれて便宜を計って貰えたら有難いと思うのですが、どんなものでしょうか。

名簿だけでも大変便利で結構ですが、更にこの手帳に写真でも張って仕事先での協会員としての自覚や責任の裏付けとしての身分証明や、前に述べた特典的な活用方

二つの願い

良い仕事をした後は大層気持ちの良いものです。又、その後で、気心知れた友人と飲む酒の旨さもこれまた格別良きものであります。

最近まで只何となくしかそう感じていなかった私ですが、つい先頃の激動した不安な政状の期間の様々な経験から、私はそのさゝやかな気持ちがどんなに大切なことを、身にしみて感じないわけにはいきませんでした。そして今ではこのさゝやかな生活の願いだけは私がどんなに貧しくても、誰にも犯されたくはないと思っていますし、まして社会とか国とか云うものがそれをおびやかす様な方向に進むことは絶対許せないと思っています。

別に酒を飲むことだけが私の喜びでは決してありませんが、そこ

法などを考慮して戴ければ会員手帳の意義ももっと高まるのではないかと思えます。

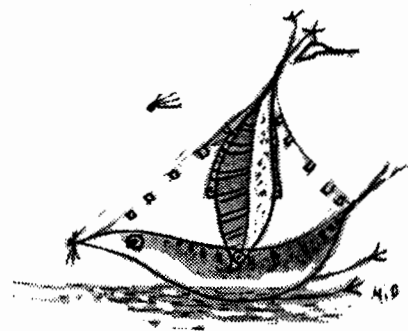
A 生

にある一人の市民としての喜びは例えば一杯の番茶に変わらうとも守り抜かなくてはならない大切な生活の基本的な願望ではないかと思えます。

私は私の職業である舞台照明と云うものの中に、時々大きな不安を抱く事があります。それは舞台照明と云う仕事 (Business) は本当に正当に存在しているのかどうか、と云う疑問から出る不安です。或る人は照明家と云うのは潜在失業者だとさえ云います。これは私自身の仕事に対する確固たる自信がないことから出てくる感じ方なのかも知れませんが、社会的とまで云わなくても、同じ舞台上で働く人達の中でも、何か職業的に確立されていない様な疑いを感じる事が往々にしてあるのです。

そこで協会と云うものが、一部の人達の親睦や地位の向上の為だけでなく、せめて照明に携わる総べての人達のこの最

底の願いである職業的な確立と云う様なことにも強く留意して欲しいものだと思つて居ります。



私は協会が政治活動をして欲しいなどとは心の片すみにも思いません。然し協会員個人々々の多くは例え眼前の生活に追いまくられていようとも、せめて多勢の人達に依つてつくられていた協会全体の力は、正当な職業の喜びや市民としての喜びを持てる生活が出来る様、遠大ではあってもその目的や方向を確定的につかんで欲しいと思っています。

職業の喜びと市民の喜びと、この二つの願いを私達の舞台照明家協会の中で求めることは欲張りでしょうか……。

一 協会員
(ニュースより転載)

おことわりとお願い

此の投書は協会ニュース第十一号に掲載されたものですが、その後投書者がお名前を知らせて下さいました。責任ある投書なので会報に再録をお願い致しました。なお投書者が匿名を希望されましたので御了承下さい。

会報の発行間隔が長いのでニュースを充実させて間をつなぎたいと思います。私達の直面する問題をニュース宛御投書頂ければニュースに掲載の上各方面から反響を集め会報も充実させる事が出来ることと思えます。

積極的に御投書を頂きたいと思えます。

ニュース編集係 岩崎

員 会 助 賛

丸茂電機株式会社

千代田区神田須田町一ノ二四
電(五二)〇三二一

日比谷サービステーション

千代田区内幸町 日比谷公会堂内
電(五二)四〇〇〇

松村電機製作所

文京区根津宮永町二二
電(六三)六一六一

近藤電気工業株式会社

世田谷区経堂一ノ一三四
電(四三)二〇九六・九六一九

株式会社 日進電機製作所

新宿区戸塚町三ノ七四
電(六二)〇二〇六・〇二〇二

電 照 社

渋谷区伊達町六三
電(四四)六七八二・九〇四二

電 社

港区芝新橋四ノ六
電(四三)七九〇八・六二五九・六二四三

バグナル株式会社

港区芝田村町三ノ七
電(五二)七六五一

光研電気株式会社

品川区北品川四ノ五六〇
電(四二)五〇七〇

編集後記

「六月の総会で会報の季刊案が決定されて始めての会報の発行です。何が原因で発行がこんなに遅れてしまったのか不思議な程見事に遅れました。

八月末に原稿が集まり、その原稿の整理が終つてみたら夏の暑さも何時の間にか秋風になり、才一稿を受け取って校正が終つたらもう十月の月さえ終ろうとしていました。それから又一カ月、やっと今編集後記のペンを走らせているわけですが、何ともやりきれぬものがあります。何か良いチエはありませんか?……会報発行の遅延の何よりの原因はいとも簡単、人手不足です。……何とかしたいものです。……と云う編集後記は昨年十一月に発行した会報才七号のものです。今回も全くそれと同じ結果になってしまいました。

今回から試みた担当システムの編集の最初の担当の秋山氏が多忙の為、又々私(大野)が編集事務を代行したのですが、結果として発行が大変遅れてしまったことをお詫び致します。

今回の会報で大変残念だったことは、五号以来連載され好評評だった丸茂富治郎氏の器具理論シリーズを編集子の不注意から掲載出来なかつたことです。次号から再び連載される様次号以後の担当者の方にお願ひ申し上げます。表紙は舞台美術家有賀二郎氏のデザインに依るものです。以後色違いで毎月気分新たに会報を飾ってくれると思います。

▲私の履歴書Vは各会員の生活記録を中心に出来ることなら我々の照明の歴史の集成の一助にしたいものと思つて企画した頁です。今後多くの会員の多くの角度からの照明家としての記録を続けたいものと考えています。特別寄稿を戴きました装置家三林亮太郎、三輪祐輔の両氏に誌上から厚く御礼申し上げます。

前回八号を除いて才二号以来三年近く会報の編集を続けて参りましたが、未熟をつくづく痛感しています。何よりも毎回発行の遅れることは今後何とか解決しないといけないと思います。次号からの編集者に宜しくお願ひしたいと思ひます。

才九号担当 秋山易三 補(大野 洋)



舞台照明家協会

會 報 才 九 号

昭和三十三年十一月二十日発行

発行所 舞台照明家協会

中央区築地四ノ二
電話(西)八五二八
(日本演劇協会内)

編輯人 秋 山 易 三

発行人 小 川 昇

印刷所 東 明 社 印 刷 所

目黒区鷹番町六四
電話(三)三六四一四

(非売品)